美術・工藝　以上述べ來つたような西方諸宗教の傳來・弘通に伴つて、隋唐時代には西方の美術・工藝も盛んに中國へ流入し、大いに流行した。もちろん繪畫・彫刻・織物・陶器など多種多様のものを含む美術・工藝の總てがそうであつたわけではないが、その少なからぬ部分が宗教、殊に佛教とともに傳わつたものであることは否定できないところであろう。佛像を主とした彫刻とか、佛畫が多かつた繪畫の場合は特にそうであつたと思われる。これは言うまでもなく、既に南北朝あたりから著しかつた事實であつて、必ずしも隋唐時代に始まつたことではない。ただ從來中國の傳統的な美術と殆んど無關係に行われていた感じの強いインドもしくは西域系の美術が、その中國流入の一層顯著になつたこの時代になつて、漸く傳統的美術と融合し、盛唐・中唐の頃には遂に新しい中國美術を生み出すまでに至つたことは、唐文化の世界性・國際性を示す多くの事例の中で最も注目すべきものの一つと言つてよい。やはりこの時代に中國獨特の工藝としてのその發達の基礎がおかれた陶器や、唐から宋へかけての時代に最高の技術的發達を遂げた織物についても同様の事情が考えられるようであるが、それらについては各論で詳しく說かれるであろうから、ここではしばらく省略に從う。

（世界美術全集第八卷、中國Ⅱ、昭和三十一年二月）